理由なき復讐

石原慎太郎著

理由なき復讐

1956年4月15日 第1版刊行
1956年4月30日 第30版刊行

著者 石原慎太郎
いしわらしんたろう

刊行者 竹内富子

株式會社 三笠書房

定価 230円
地方価 240円

東京都千代田区神田神保町二丁目
電話九段(33) 6504 7485 振替東京 22093

Printed in Japan 堀内印刷・文勇堂製

理由なき復讐

石原愼太郎

三笠書房

目次

ヨットと少年……五
理由なき復讐……六九
失われた女……一一
取り返せぬもの……一三一
黒い水……一五三
日蝕の夏……一八七
あとがき……二三一

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

裝幀　藤岡光一

ヨットと少年

「寂寥、暗礁、星の影、
わが船の帆の眞白なる
惱みを與えしすべてのものに」
――マラルメ

アーノルドカップ爭奪の、伊豆大島周航レースにヒギンス夫妻と同乘してから、少年は假令どんなに小さくとも、自分自身のヨットを持とうと決心した。

少年の漠たる豫感は當つたのだ。あの夜、レースのスタートに備えて入江の中を遊弋する中、あの光景を眺めた瞬間、彼を捕えた嘗つて無い感動は、驚愕と戰慄の中に、彼の未だ知らぬ、更に大きく更に美しい何ものかを少年に豫感させたのだ。

そして次の夜、島を周つてゴールに向う船の上、一人でウォッチに立つた少年が見たものは、前夜にもまして激しい驚愕の果、彼に未知の世界の甘い悲しい戰慄を與えた。突然目の前にぽつかり口を開けたその世界は、それを見極め抗らうすべを知らぬ彼を、當てどころを知らぬ、渇仰に近い激しさで呑みつくしたのだ。夜の海の唯黑い水と星空の廣ごりの下、少年を包んで弄んだ柔く痺れた陶醉に、彼自身ははぐれてしまつて、自分の胸の内一杯にふくれ上つた渇き

が一體何であるのか、ましてその當てどころも知らず、譯も無く泣き出したいような孤り切りの寂しさに彼は襲われ續けた。

上陸後、勞をねぎらい祝杯も兼ね彼を自宅へ誘つたヒギンス氏を斷つて、少年は逃げるよう、今は唯一刻も早くもう一度一人切りになつて落着くため家へ歸つた。

その夜、床の中で少年はあの光景を思い浮べた。又してもあの柔い戰慄が蘇つて來る。

〃レースだつて、優勝だつて、あれに比べりやなんのことあない！　結局俺は、俺だけがおいてけぼりを食わされたんだ〃

睡れぬまま暗闇に目を据える少年に、スタート前とレースの歸りの、あの二晩の光景が入り混り、重複し、今となつて更に狂おしく體ごと彼をしめつけるのだ。逃れるように、頭の内の映像を消そうと荒つぽく寢返りを打つ少年は、自分の内、弄ばれ痛めつけられながらも、尙その正體の知れぬ甘く苦しい惱感に惹かれる己れと、それに對して怒りとも焦りともつかぬ自らを何時になつても合一さすことが出來ず轉げ廻つた。そしてその怒りとも焦りともつかぬ氣持すらが一體何であるかは、彼自身にもわからぬことだつたのだ。

がそれは、少年に突如開けた性と言う世界の官能に、スタート前のあの光景によつて豫期しなかつた自然が荒々しく、與えた戰慄の、鋭い刃を加えて、彼を襲い切り苛んだ目に見えぬ殘酷な力と、その正體のつかめぬまま抗し切れずに蹂弄される自分に對する憤りでなかつたろう

か。

丸一日を超す大島レースを終え、彼の得たものは戰歴を一つふやした年少ながらも古强者の誇りではなく、夜空の下、海の上で少年の胸に芽生えた譯のわからぬ新しい苦しみであつた。

轉々と寢返りを打つ内、突然、

〃そうだ！〃

彼は蒲團をはねのけて起き上つた。闇の中に瞳をこらして、この時少年は決心したのだ。

〃俺も自分のヨットを持とう！　どんなに小さくても良い。俺のヨットを買うんだ。そして、そして同じことをやるんだぞ！〃

この決心に少年はいたく滿足した。彼はようやく我が身の寄り所を摑んだのだ。少年は安心して目を閉じた。疲れに心持良く睡りに入りながら彼は夢を見た。それは大島の差木地の沖合で見た岩礁の間の深淵の暗い底に、一條光に照らし出されて疾走するヨットでもあり、またあのほの白い肢體でもあつたのだ。夢は何時の間にか變つて行く。少年は彼のヨットに乘り、月の光の下でデッキに腹ばいになつていた。彼のヨットは、スナイプともシーホースともつかぬ小型の眞白い船だつた。寢そべつたまま足の爪先で舵を取り彼は船を走らせている。日のぬくもりに甲板は暖かつた。それは奇妙にも、歸りの夜一人取り殘された寂しさの内で渴えた少年が何故かしきりに想い出そうとした幼い頃死に別れた母親の懷のぬくもりだつた。少年は力一

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

杯、船を、母親を抱きしめた。船は母親に、母親は何時かヒギンス夫人に變つている。夢の内で彼は氣恥しくなつた。そのまま夢も見ず彼はぐつすり睡りに睡つた。二晩かかつたレースの疲れが少年の體を覆つて行く。白い彼の齒が立てる齒ぎしりは、夜中、船で聞くリギンの軋る音に似ていたかも知れない。

それは五月のある土曜の夜であつた。五月に入つて多くなつた南の風がその日は夕方から強さを增して、スタート間近の八時には、各船に時計を合わすよう告げた陸からの擴聲機は〝只今の風速十二米、風は夜半にかけ尙やや强まる見込み、諸船注意を要す〟と、日本語と英語で交る交る繰り返した。

尤もその聲も、帆桁（ブーム）やステイを切る風の音と、船體を叩く波の繁吹きで殆どの船には聞えはしない。が放送は聞えずとも、スタート前の譯も無い興奮に、用も無いのに船中の裝備をひつきりなしに撫でたり叩いて廻る乘組員（クルー）達には、帆（セール）を引きしぼつたマストの軋み、張り切つたステイの手應え、或いは波よけ（ブリーク・オーター）にそつて前甲板（デロント）を洗い拔ける水足の速さで、季節風の下、海づらの荒れ模樣が良くわかるのだ。少し位の荒時（しけ）では減多に事故の無いクルーザー級のヨット

ではあつても、晝とは違つて目に見えぬ間に船を持ち上げ、突き落しては碎けかかる黑い水の飛沫に激しく横鬢を繁吹かれる度、クルー達は手近な部分に摑りながら一寸不安氣に顏を見合わせてはにやつと笑い合つた。そんな瞬間、耳を澄ますともなし緊張した體中の五感へ、今までは耳鳴りのようにしか感じていなかつた風と波の叫びが、急に限りなく遠い所から船一點をめがけせまつて來るのが感じられる。沖を見すかすように瞳をめぐらせて見上げる空は、飛んで行く雲一つない滿天の星だつた。

沖の吹き具合を見るために灣外に出ていた少年達のヨットが、再びスタートライン内に入るため港の壁をかすめて走る時、吹き千切られたように斷續する擴聲機の聲が耳に入つた。

「……スピード……ウィンド……トウェルブミーターズ……パー……セカンド……」

少年は誰に言うともなし、大聲でその放送を復誦した。

「風速十二、風は尙ます見込み、か」

「大丈夫だよ」

コックピットから、舵輪を握つたままヒギンス氏が笑つて言う。船室で携帶品を整理していた夫人が出て來、一寸笑つて頷くと寄り添つて空を仰いだ。

ヒギンス氏はヨットの古强者である。夫妻が日本へ來てから送つたクルーザーの〝シルフ〟號は小さいながら既に瀨戸内から北海道へかけて、表日本周航の航歷を持つていた。桑港のヨ

目深に下した鍔の下で鋭い灰色の目を走らせる日焼した氏の顔は、陸のクラブハウスで見せる氣さくな愛想の良さとは打つて變つて、憂鬱に緊張していた。子供の無い夫妻が、風の無い日曜など少年を乘せて眞赤なスポーツカーを飛ばす時のはしやぎようは何處にも見當らない。舵輪を握りながらクルーに命令する彼の顔は、假令笑つてはいても、いつも目だけは絶えずコースの彼方を眺めていた。

少年はそんなヒギンス氏が好きだつた。港にやつて來て、船に乘り歸る時まで騒ぎ散らす外人の多い中で、この夫妻だけが本當に船が好きでやつて來るように思われる。

ヒギンス夫人は夫君よりも十程年下の、溫和しい、身のひきしまつて小柄な美しい女だつた。彼女は結婚後來日してからセーリングを習つたのだが、翌年にはもう、新造した〃シルフ〃のクルーとして北海道まで遠征したのだ。少年や夫と代つて時折舵をとる時、コースが一寸でもフレていたりすると、目ざとく見つけたヒギンス氏が大聲で注意する。そんな時、少年を見返りながら一寸肩をすくめてあやまる夫人を、彼はくすぐつたいようなまぶしげな眼差しで眺めた。彼にはふとそんな夫人が、自分にはいない姉のようにも思えるのだ。

週末にはクラブに來て、艤裝を手傳つたり、人數の足りぬ船のクルーを勸めたりする少年は何時しか夫妻と親しくなり、今年に入つてからは殆ど附きつきりのヨットボーイとして働いて

いる。何をやらせても敏捷で器用な少年を氏は大層可愛がつた。

ヒギンス氏と知り合つて半年近くなるのに少年は未だ同乘して大島を廻つたことがなかつた。と言うより今までに大島廻りは全く經驗がなかつた。前にも他の船でこのレースに參加したことはあつたが、船主の外人達は外海へ出て船がぶり出すとたちまち青い顏をして參つてしまつたり、他の船に遙か引き離されると途中でレースを投げて、伊豆の下田か伊東へ溫泉にでも入りに曲つてしまうのだ。そんな時港に入るとたちまち元氣を取り戻し、行きから遊覽船の女子供にふざけて口笛を吹いたり手を振る彼等の横面を、少年はロープを締めながらいかにも輕蔑した面持で睨みつけ、諦め切れぬ想いで水平線を振り返つて見るのだつた。それ故、ヨットでめぐる大島は少年にとつて言わば、そばまで行くとかき消えてしまうお伽話の島でもあつた譯だ。が今度は確信があつた。ヒギンス氏と一緒ならば行きつくことは無論、優勝すら無理ではなかつたろう。後は唯スタートを待つばかりの今、強くなつた風波は多少氣にかかりはしたが、〃これに乘りさえすればもう大丈夫〃と何か追つ手を逃れたような安らぎさえ感じるのだつた。

スタート二十分前になると陸のポールライトと結んでスタートラインの標識を示すために、港の二百米沖に投錨したフリゲート艦がマストに大きい眞青なライトを點し、サーチライトが光つて大きく海面を這うと陸のポールを捉えた。

と、その時少年は目前に見たのだ。嘗つてお伽話で聞き、物語で讀んだ幼い日の夢の出來事

を、それは暗黑の海と空に、目をくらんで一條太くきらめく白熱の帶の下、突如、黑い馬に黑い鞍を置き、駻馬の吐く息も熱して紅く、眞白い巨大なマストに風をはらんで疾走する、傳說と神話の騎士にも似たヨットの姿だつた。忽ちそれはかき消えると、次いで全身白裝束の妖精が躍り出て通り過ぎる。舷側に點した眞赤なデッキライトが足許から帆を染め上げ、痛ましく手傷を負うた若武者のように又しても闇に消えて行く。後には光の下、風を嚙んで躍る波頭だけがあつた。それは幻覺の果、永遠にも感じられる一瞬であつた。少年は固唾を呑んで立ちすくんだ。少年の鼓動は激しく、その掌は力一杯ステイを握つている。

「やあーつ、やあーつ」

彼は聲限り叫んだ。

その聲に、又一隻が眞横に風を受け船體を一杯に傾斜させながら、一線に輝いた幻覺のスクリーンを沖を目指して突つ切つて行く。港の仲間で少年の一番親しい時次の乘り組んだ〝キャスリン〟である。それを見ると少年は無性我が身が、あの巨大な白い鳥になりたくなつてヒギンス氏に叫んだ。

「もう一度沖へ出て見ましよう！」

「OKマーキ」

ヒギンス氏は舵輪を力一杯廻した。船はひときわ傾くと大きく曲線を描いて反轉した。

目を凝らすと、サーチライトの鮮光の反對側、星の落ち込んで行く沖合に、今は遙か遠く駈け去つた騎士達の後影が望まれる。船を嚙む波の高さで舷側燈の灯りは見えぬが、傾斜し同じ間隔に群立したほの白い帆だけが、目もくらむ幻影の果、魅き込むように暗く廣い海の彼方に、嘗つてなく激しく悲しみにも似た當てどころない鄕愁を少年の胸に引き起すのだ。海に馴染み船に馴染んだ少年にとつても、それは未だ知らない戰きであつた。幼い日の怪奇で美しい夢にも似たこの光景は、彼にとつて倦くことの無い海の生活へ、更に新しく思いもよらぬ世界を開いた。想像を超えた世界に踏み込んだ人間のように、少年は幾度も目をきつちり閉ざすと又大きく開いて見た。

この海を越えて何處か果なく遠い旅へ、未だ知らぬ新しい驚きの世界が自分を待ち受けていると言う豫感の戰慄が少年を襲い、彼はそれを信じた。

沖へ向つた〃シルフ〃はサーチライトの條光に突つ込んだ。瞬間眞晝よりも明るい、むせかえるような光の下に、船の總ての部分がかつきりと浮び上る。繁吹に濡れた甲板は磨いたように、まぶしく輝いた帆を白く映した。見上げる主帆にステイの影が一本一本描いて引いたように通つた。目に入るあらゆるものが、闇になれた瞳に光を放つて寫る。ここには今一片の闇もなかつた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.